

―粘性洗脳怪人に改造されたピンクに囚われて

雑魚戦闘員に堕ちるまでザーメンを搾り取られる話

―悪堕ちヒロインに堕とされるの

シーン1

「リーダー、リーダー！ 起きて下さい、リーダー！」

「よかつた、さっきまで死んだように動かなくて、心配しました」

「……私もさっき気がついたところで、体も動かさなくて、光源もないロッカーみたいな場所で腕もほとんど動かせないので調査は……その、あ、仕方ないですから、セクハラとか……むしろ、ご褒美……いいえなんでもありません！」

「ひうつ、なにか硬いのが……だ、大丈夫です。それよりも、ここから脱出すること考えないと……んつ、わ、悪いのは敵組織なんですから、リーダーは悪くありません！」

「で、でも、男の人はこうなっちゃったら……その、又、又いて落ち着かないと、何もできなくなるんですよね……わ、わたし何を言ってるんだろう……だ、大丈夫です！ ち、知識はありますから」

「はい、暗くても大丈夫、です……」

「リーダーよりも先に、意識が戻ったからでしょうか、すこしずつ目が慣れてきました。だから、私に任せて下さい……」

「何を、つて？ わかりきつたこと、聞かないで下さい。股間の大きくなつたこと、なんとかしないと」

「脱出にも支障がありますし、なによりリーダーも、このままだと、つらいですよ……戦隊スーツの股間のところ、パンパンに膨らんで、あんつ、私の太腿に、当たってます……む、むっちなんでしてません！」

「ではスーツのズボンを脱ぎましょうか」

「んもう、恥ずかしいがらなくて、いいですよ。これは敵の罠ですからリーダーは悪くないと思います。それに勃起を収めるにはズボンが邪魔ですし」

「あ、スーツの腰の部分の解除できました。ズボンを、んしょ、ずりおろして――」

「は、恥ずかしいですけど……私を信じて下さい……ん、んんつ……はい、下半身、すっかり裸になっちゃいましたね。パンツまで、いっしょに脱げちゃいました」

「もちろん、私も詳しくはありませんが……たしか、漫画で見たのは……こうやって、女性の太腿で――」

「私のことは、大丈夫です、リーダーがすつきりできて、男性器の勃起が収まれば……あふ、はふう、そのために、一生懸命頑張ります！」

「んん、んんっ、いかがですか」

「男性器、ビキビキに反り返ってすごく硬い……♡ですから、むっちりなんて……もういいですっ、こうやって竿の部分にすりつけて……べっぴんに必要なことですから」

「ですが、スーツ越しに、ん、んんっ……むむむ、スーツ越しだと効果が薄い気が……大丈夫です！私に任せて下さい！」

「私も、あそこが濡れてきてます。リーダーにだけ恥ずかしい思いをさせるわけには、わ、私のスーツも解除……しちゃいますね」

「ど、どうです？ お肌同士の方が……んあー？ びくんって跳ねました。効果は抜群のようですね」

「ショーツをすり下して、濡れたお股、晒しちゃいました」

「では、このままお股の間にオチンポを挟んで――はあ、はあ♡ ぬるぬるしてきた♡ 私うまくできてますか？ だ、大丈夫です！」

「リーダーの遅いものに、ご奉仕します……ちよときこちないかもですけど、いっしょうけんめい、がんばります」

「たしか、そういうお店だと、ローションを使うって聞いたんですけど……私のほうも素肌であわせたら、汗でかわりが……、これでどうです？ あそこからも、ん、んん、おツユが溢れて、ぬちゅぬちゅになってきて、あ、ああ、はふあ、くふあ……痛かったら……言つて下さい……ね」

「ん、んん、思ったよりも感触が、よくつて……え、え、大丈夫です！」

「非常時ですから……だ、男性の方は多少は、その、こういうことで妄想しちゃうのも仕方ないですよね……あ、あん、あんん……むしろ、いけないって思うと、興奮してえ……」

「ちよと、気持ちいいかも……です……はふ、くふう、んふうう……お股で、んう、んうう、んつうう、勃起した竿を扱きながらあ、おっぱいも、押しつけていきますね、ん、んん♡ これで、いいのかな……」

「ね、男性つて、こーいうので興奮するんですよ……は、初めてです！ こ、こんなことするの……と、ともかく早く又いてしまわないと」

「そうなんだ、つて納得しちゃいます……わ、私のおっぱいも……スーツは特注で作ってもらったんですよ。『カップなんて持っても嬉しくは……男の人の視線が……い、いえ、仕方ないですから。わかつてます、そ、それに今は役立てそうですし』」

「むゝにむに……むにに……これで、いいですか……マシユロみたいなおっぱいを押しつけながら、スマタも……」

「すり…すり…していきます…慣れてないのは、許して下さい…あ、このまま…緊張しますけど…唇もゆつくり近づけて——んちゅ、ちゅ…あ、ちゅー、すごい…ん、ん…」

「ちゅばちゅぶ、んちゅぶ…尊敬するリーダーと、やらしいキス…してしまいました…♡ ふにふにした唇を、ちゅば、ちゅぶ、絡めあつて、んれろれる、れろろ、突き出したべロれ、やらしく突きあつて、しまいます…」

「は、恥ずかしいけど、とつても気持ちよくつて、いえ、こちらのことですから、気になさらないでリーダーは、精液を吐き出すことに集中して下さい」

「わたしも不慣れですけど…がんばります…女の子の部分で…男性器をいっぱい擦つていきますね…ん、ん…これで感じてますか…あ、ああ…なんとか言つてえ…男性器はかなりガチガチで、カウパーもだらだら溢れて、なのに…んう、んう…なかなか射精しないですね？」

「もしかして、リーダー、我慢してたりします？」

「このまま出して、私の体、べとべとに汚しても大丈夫ですから」

「もっと、刺激が必要でしょうか？」

「では、私の指先を絡めて、このまま扱っていきますね」

「熱い…な、なんとか握れそうですね。し…こ、し…こ♡ ビクつて震えて、感じてくれるの、うれしいです…このままもっと速く、し…こ…♡」

「先つぽから先走り汁、ぬるぬるで苦しそうに跳ねてるのわかります。いいんですよ我慢なんかしないで…はあ、はあ…そろそろ射精しちやいそうですね？ もっと早くしたほうがいいのか？」

「ほらほらあ、し…こ…し…こ…もう我慢しないでいいですよ」

「精液、吐き出して楽になりました♡ あんんんっ、いっぱい出せました。リーダーの精子、どろどろで熱くつて…♡」

「き、気にしないで下さい。コレは必要なことなんですから。それでエッチに興奮して、射精してもらえたなら、良かったです」

「ふー、ふー♡…精子の匂いも気にならないですから。ん…まだ、リーダーのオチンポ、全然、萎えてないですね」

「これは、もっと出してもらわないと、いけませんね。では、私のおまんこで、直接…つて、な、なに言ってるんだろ…」

「やつ、やあつ…手が勝手に動いて…うそっ…これ、誰かに、体に乗っ取られてるー？…ダメー！ごめんなさい…体が勝手にー…」

「リーダーの男性器を握つて、あ、ああ…あああつ…あぐ、ふぐぐ、んぐぐう…私、処女なのに…自分で腰をおろしちゃつて…ふう、ふう…」

「ロストヴァージンされにいつて…ひぎ、ひぎべっ…」

「い、痛い、んい、んいッ、んっいいい……奥までリーダーのが入っちゃつてゐるのわかるう……だ、大丈夫です。これぐらいの痛み……」リーダーも悪くないでから……この、体を操つてえー?」

「んあつー？ あ、あつ！ ……あんっ♡ も、もう、体が勝手にピストン、はじめちゃつてえ、あぐふぐう♡ あひ、はひい、さつきまで、処女だったのに、何でこんなに感じてしまつて、ます…あひ、はひい、んいっ♡」

「やん、やんやんんっ、そんな、腰い、いっぱい振つてしまいます…あつ、あつ、あつ、あああつ♡ こんなこと続けてしまったら、リーダーにナマで出されてしまうのに、ふひ、くひい、んい、んい、わたしじやありませんー？ 私じやないのに体が勝手にー？」

「間違はなく、くひ、んひい、敵の罠です♡ 止まらない!?! こんなのおかしいのにつ!?!」

「いっぱいリーダーのおチンポ食ってしまつて、あお、あおう、あおおつ、いい、いいの、気持ちいい、とっても良くなって、しまつてえっ♡」

「ごめんなさい、リーダー♡ なんとか耐えて……お願い……中に出すのはダメだから、あ、ああ♡」

「中でぴくぴく膨れてるのわかつちゃう!？」

「わ、わかつてます……私の体を操っている敵のつ……んあつ……せい、ですから。リーダーは悪くないです……んつうう♡ それだけは、あ、ああ、避けたいです……あん、あん♡」

「お願いリーダー、なんとか打開策を考えて、この状況を脱する方法を模索、あ、ああ、して下さい♡」

「私の意思じやつ……だめっ♡ 胸を擦り付けて腰をぐりぐりいつ……♡ ガチガチのオチンポ、おまんこでぐちゅぐちゅ、締めつけてしまいます♡」

「頑張つてリーダー。耐えてください」

「あなただけが、希望の光なんですから、あ、ああ♡ オチンポ、ビクビクして、もう出そうじゃないですか、そんな、や、やあつ…ダメダメダメえー？ 抜いて！？ 抜いてくだつ、あ、あつー？」

「我慢できないなんて、いや、いやアツ…せめて、お、おおつ、逆に奥にい、ぶつ刺さつてえ…あちゅういの中でふきでちゃたあ♡んひっいいいっつ♡♡♡♡ーうっ?」

「ああ……熱くて、濃厚なリーダーのせええ……私のおまんこに……あえ……んええ……どつどつ、注ぎこまれてえ……ああ、ああ……しかもオチンポ、子宮の入り口に、ぐりりつて、ひお、ひおう、押しつけられて、射精のときのビクビク……」

「私の意思じゃないですから……こんな腰押し付けて、せ、精子絞り尽くすようにごりごりこすつてえ……♡ あつおおおおッ♡」

「んえ、はええ……リーダーのナマ出しで、思い切りアクメひやつたあ、はあ、はあ……はあ♡……ん♡……ふー、ふー……♡」

「お腹の中あ、精液でいっぱいえ…すごかった、です…あ…そんな顔しないで…私は大丈夫、です…敵に操られていた私が悪いんです…リーダーは悪くないです」

「ま、まあ、結果的にリーダーの勃起は収まったですし…ピンクとしての任務も果たせましたし…はふ、くふう…私と、ここに閉じこめたのも、あそこを勃起させて逃げられなくなるように仕向けたのも、すべて敵の罠ですから、リーダーはなんにも悪くありません」

「ですから、私への中出し射精も、気にしないでいいですよ」

「すつきりしたところで、この状況を脱する方法を考えましょう。リーダーならきつといいアイデアを思いつけますよ」

「頑張りましょう。私ピンクが、天野沙月がついてますから♪」